村田和代
井出里咲子
編

EDITED BY
KAZUYO MURATA
AND
RISAKO IDE

雑談の美学

言語研究からの再考

THE KALEIDOSCOPE OF SMALL TALK
A LINGUISTIC APPROACH

ひつじ書房

村田和代
井出里咲子
編

EDITED BY
KAZUYO MURATA
AND
RISAKO IDE

雑談の美学

言語研究からの再考

THE KALEIDOSCOPE OF SMALL TALK
A LINGUISTIC APPROACH

ひつじ書房

雑談の美学—言語研究からの再考

The Kaleidoscope of Small Talk: A Linguistic Approach

Edited by Kazuyo Murata and Risako Ide

発行　2016年2月18日　初版1刷

定価　2800円＋税

編者　© 村田和代・井出里咲子

発行者　松本功

装丁者　坂野公一＋吉田友美（welle design）

印刷・製本所　三美印刷株式会社

発行所　株式会社 ひつじ書房

〒112-0011 東京都文京区千石2-1-2 大和ビル2階

Tel.03-5319-4916 Fax.03-5319-4917

郵便振替 00120-8-142852

toiawase@hituzi.co.jp http://www.hituzi.co.jp/

ISBN978-4-89476-786-7

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、
小社かお買上げ書店にてお取りかえいたします。ご意見、ご感想など、
小社までお寄せ下されば幸いです。

序章
雑談とその諸相

井出里咲子・村田和代

1. はじめに

職場、学校、家庭、公共場面、サイバー空間といった日常生活のあらゆる場面は他愛のない雑談に満ち溢れている。友人同士のおしゃべりや職場でのちょっとした立ち話。近所の人やタクシー運転手と交わす世間話から、LINE や Facebook での繋がり合いのやりとり。テレビをつければバラエティー番組のタレントたちが楽しげなおしゃべりに興じている。いわゆる雑談は、とりとめもなく、目的もなく、気楽にさまざまなことについて喋る行為を総じて指すが、我々はなぜこうした取るに足らないおしゃべりとしての雑談に興じるのだろう。

近年「雑談力」という言葉が世間に定着するほどまでに、社会的スキルとしての雑談の価値が注目を浴びるようになった。齋藤孝の『雑談力が上がる話し方—30 秒でうちとける会話のルール』は売上 43 万部超の 2013 年度のベストセラーであるが、初対面の相手と自然に話す上でのノウハウが、大学生や営業職につくサラリーマンなどに向けて伝授されている。ほかにも「伝え方が 9 割」、「しゃべる技術」、「相手の心をつかむ話法」といった謳い文句に彩られたハウツー本が書店に並ぶが、これはビジネスに限らず恋愛や人付き合いなどの世渡りの上で、雑談的な能力が欠かせないスキルであることを物語っている。

こうした雑談力への希求の背景には、社会の近代化に伴う地縁組織の崩壊や核家族化、また生活全般における対面コミュニケーションによるつながりの希薄化があるだろう。一方昨今では、安心・安全なくらしのためのネットワークの再構築が求められ、テーマ型コミュニティが各地で発生し、また

SNSの発達に伴いつながりの再評価が行われるようになってきた。そうした中で人と人とがつながりあう術としての雑談に注目が集まっているのであろう。

2. ことばの交感的機能

そもそも人はなにゆえに話すのであろう。言語、そして話すという行為は、社会的集団の結束を促進するために進化したヒト特有の能力である。『ことばの起源—猿の毛づくろい、人のゴシップ』を著したダンバーによれば、群れの仲間内での毛づくろい(グルーミング)は猿や類人猿が従事する最も社会的な行動であり、友情と忠誠の証として一日の時間の10～20%もがその行為に費やされている。毛づくろいのような肉体的接触で集団の連帯を維持、強化していた我々の先祖は、より大きな集団を維持する必要が生じる過程で、声による接触に依存するようになった。そこで交わされるやりとりは、自分と相手との関係構築だけでなく、他人同士の関係性をも確認するためのゴシップ的な性質を帯び、ひいては社会の全体性を司る上で機能するようになる。人の会話の中で、ゴシップも含めた社交的な話題は全会話時間のおよそ三分の二に及ぶことは多数の調査に報告されていることだが、こうした言語のもつ社会的関係性維持の機能に初めて当てられた用語が、マリノフスキーの「ことばの交感的機能」(phatic communion)である。

文化人類学者のマリノフスキーは南太平洋トロブリアンド諸島にて、交換、贈与という社会経済の本質的な行為をめぐる参与観察を行った際、人々が夜な夜な焚き火を囲んで話す姿に、言語には情報交換だけでなく、目的もなく自由に交わされる('language used in free, aimless, social intercourse')交感的または交話的な機能があることを報告した(Malinowski 1923: 142)。近所の人に声をかけるようなあいさつや天気の話などは、情報伝達や合意形成を直接の目的としないが、話し手と聞き手とが互いに相手を認識し、つながりとしての一体感や親密感を感じる上での社会的機能をもつ。ヤコブソンの言語の七機能の1つでもあることばの交感的機能は、しかしながら言語学や

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人類学の初期の流れにおいては、些末で特に重要な意味をもたない言語事象として、長い間分析の対象とは見做されてこなかった。このことは、たとえば英語における特段意味のないおしゃべりや雑談がスモールトーク（small talk）と呼ばれ、より重要で価値のある talk や speech と区別されてきことと無関係ではないだろう。ここで社会言語学や言語人類学を含めた広義での言語学において、こうした雑談の研究が辿ってきた系譜を、英語を中心とした会話と日本語会話の研究動向とに区別して簡単に紹介したい。

3. 雑談の言語学

近年、言語学の分野では、録音録画機器やコーパスの発達などに伴って言語データの収集方法が飛躍的に進化したことから、文や節を単位とする「発話」から、一文一節以上のまとまりとしての「会話」や「談話」の研究が実践されるようになってきた。その中で、雑談やスモールトークは「自然会話」、「日常談話」といったカテゴリーの中に入れられ、談話分析、会話分析、自然言語処理などのさまざまな方法論や理論を用いて研究されてきた。しかしこうした雑談的なやりとりは、あくまで日常会話や自然談話をデータに日常的な「褒め」や「話者交代」、「コードスイッチ」といった分析事象を抜き出すために用いられ、雑談を構成する語用論的、行為連鎖的、社会言語学的側面を捉えてはいても、雑談の本質そのものを探求せんとする研究は多いとは言えない。

ここで改めて欧米の社会言語学、語用論、言語人類学を含む広義での言語学分野における会話（conversation）の定義を紐解くと、そこには会話を「日常的で普通の会話」と、そうでないものとしての「制度的な会話」とに大別する流れがある。たとえば Levinson（1983: 284）は、普通の会話（ordinary conversation）を「制度的場面の外で取り交わされる二名以上の参与者による自由参与の話」（下線は筆者による）と定義する。さらに普通の会話は、「実利目的でなく、話そのものを楽しむ」ものであり（Eggins and Slade 1997: 6, 19）、「より制度的なインタビュー、討論、会見、宗教儀礼などから区別さ

れるもの」(Duranti 1997: 250)としても認識されている。また Goodwin and Heritage は、普通の会話が、自然界の言語使用の本源的場(primordial site)を構築し、より専門的コミュニケーションの場への出発点となると指摘している(Goodwin and Heritage 1990: 289)。

このように専門性のない、あくまでも日常的なデフォルトとしての会話のもつ社会的機能に最初に着目した Beinstein(1975)は、雑談としてのスモールトークを「沈黙」と「討議」(meaningful discussion)との中間点に位置する現象と捉え、総じてスモールトークがアメリカ社会の中産階級特有の発話形態であることを考察した。またイギリスのさまざまな社会的場面でのスモールトークを研究した Schneider(1988)は、その雑談内容を、パーティーやパブで積極的に交わされる「オフェンス型」と、スーパーのレジや駅などで時間を潰すために交わされる「ディフェンス型」の二種に分け、それぞれの型におけるインターアクションの構造や話題転換について分析した。

雑談としてのおしゃべりを、特定の社会的状況下でのフィールドワークに基づいて分析した代表的研究に、Lindenfeld(1990)と Bailey(1996)がある。Lindenfeld は参与観察、インタビューなどを組み合わせたことばの民族誌の手法を用い、フランス都市部の市場をフィールドに、売り子と客とのおしゃべりを分析している。売り子の呼びかけ、客とのおしゃべりやジョーク、そしてからかい合いを通して、Lindenfeld はスモールトークが都市コミュニティに生きる人びとが習得すべきスキルであり、またこうしたおしゃべりのある場所に、共通の規範意識を想起させる実践コミュニティが存在することを指摘している(1990: 47)。一方でおしゃべりとしての技能がコミュニケーション上のコンペテンスの表れであるということは、同じ規範意識を持ち合わせない人々が対峙した際に生じる亀裂から明らかである。Bailey(1996)は、1992 年にアメリカ、ロサンジェルスで勃発した「ロス暴動」の際、韓国系の商店街がアフリカ系住民によって放火や略奪にあったことを契機に、ロサンジェルスの韓国系店舗にて、韓国系の店員とアフリカ系アメリカ人の客とのやりとりをフィールドワークした調査を行っている。その結果、他愛のないおしゃべりにおいて相手への敬意(respect)の示し方が、韓国系とアフ

リカ系とで大きく異なり、それがおしゃべりにおける齟齬を生み、結果として互いの帰属集団への侮蔑意識を生み出していることを明らかにしている。

Lindenfeld と Bailey の研究がそうであるように、90 年代以降の欧米での言語研究では制度的談話（institutional talk）や職場談話（workplace discourse）が盛んになり、雑談としてのおしゃべりの意味機能について、サービス場面やビジネスの場での会話をデータに調査する傾向が高まった。アメリカ社会のコンビニ店と花屋における店員と客のやりとりの間に生じるスモールトークを分析した井出（2005, 2008）は、協働での自己開示や声の強弱、参与者の視線や体の向きなどをきっかけに実践されるフレームシフトの過程を分析し、スモールトークが場の参与者間に同調のリズムを生み出す語用論的機能について考察した。さらに Coupland（2000）では、職場の同僚同士の雑談から、旅行代理店やスーパーのレジでの店員と客のおしゃべり、さらに夕食を囲む家庭の食卓での噂話などをデータに分析が行われている。ここでは、同時に多様な機能をもつ発話の中で、対人関係に関わる機能が突出する話しをスモールトークと捉え、スモールトークを介して対人関係が相互的かつダイナミックに構築される様子が報告されている。さらに職場談話の異文化間比較研究として、ニュージーランドと日本の職場で同僚同士が交わす雑談やユーモアの考察をした Murata（2014, 2015）がある。ここでは、ニュージーランド人と日本人とが抱く異なるミーティング、会議や打ち合わせ観を考察しながら、中核となるビジネス的会話と社交目的の会話とが、それぞれ異なる方法で関係性を構築する過程が分析されている。

4. 日本語会話の雑談研究

翻って日本語の日常会話の分析においても雑談データは多く利用されている。たとえば初対面会話は、ある特定の状況下で引き合わされた会話参与者が最初の自己紹介から交わす雑談的なおしゃべりをデータとするが、その雑談において選択される話題の種類、話題の開始と終了方法、話題転換のプロセスにみられる言語・非言語的特徴、また話題の推移の仕方についての分析

が多くみられる（宇佐美・嶺田 1995, 串田 1997, 三牧 1999, 河内 2009）。雑談の中の局所的な構造については、たとえば李（2000）は雑談の中に生じる体験談としてのナラティブを分析対象とし、長く話しを続けていく上での会話の管理方式を分析している。また親しい友人同士の雑談に生じるナラティブについて分析した大津（2005）では、友人同士の雑談ならではの会話における冗談や可笑しみが協働して構築される様子が、声の引用（創作ダイアログ）を巡って分析されている。雑談の構造を総括的に分析した筒井（2012）は雑談を話題で区分し、話題ごとの内容の種類とその話題を構成する連鎖組織の分析を行っている。さらに、藤本他（2003）や熊谷・木谷（2005）では、雑談をインタビューや討論といった形式度の高い会話と比較した上で、雑談の話題の広さ、テンポの良さ、会話進行上の役割が固定しないといった特徴を記述した。

これらの日本語談話の展開に関わる研究の一方で、日本語教育の分野では第二言語としての日本語による雑談研究も盛んである。たとえば樋口（1997）では母語話者と非母語話者との初対面会話において、相手が母語話者かどうかによりいかに自己紹介の仕方が変わるかを分析している。また佐々木（1998）は母語話者・非母語話者それぞれに対する、母語話者の雑談における情報要求発話の量についての分析を、さらに伊集院（2004）は、雑談のデータを用いて、相手が母語話者かどうかによっていかにスピーチスタイルが使い分けられているかについて分析をしている。

5. 雑談をめぐるいくつかの指標

以上のように、国外・国内ともに、雑談やスモールトークを利用した研究はさまざまにある。しかし、雑談そのものの本質について考える論考は多いとはいえない。本書は雑談的な会話をデータに、さまざまな角度からコミュニケーション、そして人間社会における雑談の役割について考えることを目的とするが、その際行うべきこととして、何を「雑談」と見做し、何を「雑談でない」とするかが挙げられるだろう。本書では雑談の定義そのものは各

章の執筆者に委ね、あえて共通した雑談の定義を設置していないが、たとえば前述の筒井(2012)は『雑談の構造分析』において、雑談を「特定の達成すべき課題がない状況において、あるいは課題があってもそれを行っていない時期において、相手と共に時を過ごす活動として行う会話」(筒井 2012: 33)と定義している。この定義を基点として、次に雑談と雑談でないものを区別する上での3つの指標を挙げる。

筒井の定義にあるように、何が雑談的で何がそうでないかを考えるときに、その会話がおこる状況下で「特定の達成すべき課題」があるかないかという問題がある。ある文脈において話がどのような目的をもって遂行されているのかを考えると、それは「目的遂行型」(transactional)と「対人関係調整型」(relational)の2つに分けられる。前者は、情報伝達や問題解決を中心としたタスク遂行のための会話であるが、後者は対話の相手との関係性を構築、維持し、共感としてのラポール形成を行い、参与の場の空気を作ることを優先した会話である。たとえば美容室で美容師と客とが髪型を決めるために交わす会話は目的遂行型であるが、施術中のその他のおしゃべりは対人関係調整型であろう。ここで仮に雑談に対する目的遂行型の会話を「正談」と呼ぶとすると、正談の会話内容は雑談と比べてより叙述的であり、メイントラックであり、「製品の使い方を指示する」、「俳句の成立ちについて講義する」、「治療方法について相談する」などのゴールとしての着地点が明確に存在する。これに対し雑談は、サイドトラックであり、いつの間にか自然発生し、時として正談から脱線する形で生まれ出る。またタスク遂行が直接の目的ではないことから話の内容も特に定まっておらず、それゆえにいつでもやめられる会話といえるだろう。

雑談とそうでないものを区別する2つ目の指標となるのが、会話の起きる場の性質としての「場所性」である。たとえば雑談は、家族や友人などの仲間内といった私的(private)でインフォーマルな場面を想像させるのに対し、雑談でないものとしての正談は、より公的(public)でフォーマルな場でのしゃべりを連想させる。より具体的に言えば、正談の生じる場所は、インタビュー、討論、会見、宗教儀礼、教室談話、医療現場、法廷談話などと

いったさまざまな「制度的」(institutional) な場面である。これらの制度的場面において交わされる正談は先に挙げたように、基本的に目的遂行型で、中核となるタスクに基づき一連の行為の連鎖や、誰がどの順で喋るのかという話者交代のデザイン、また何について話すかという話題選択の上で、参与者の言動が制限される (Drew and Heritage 1992)。これに対し、雑談の場はより日常的でカジュアルな場面であり、特に会話の形式が意識されることのない無標、デフォルトの領域だということもできるだろう。

上記2点に関連した第3の指標として、雑談と正談では話し言葉の形式に伴って会話スタイルが異なることが挙げられる。たとえば、医者と患者との診療場面や教師と生徒との教室談話といった制度的場面での正談は、より形式的で定形的な表現や専門用語が用いられ、標準語の使用がデフォルトの場合が多い。またこうした正談は、本質的には真面目で秩序立ったやりとりであるのに対し、雑談はどちらかといえばユーモアを伴い、面白さを優先し、地域語などのレジスターが用いられる向きがある。また混沌として、最初から予測される筋書もゴールとしての着地点もないことから、「なんでこんな話になったんだっけ？」というような偶発性やアドリブ性を伴い、それが雑談の醍醐味を生み出す。さらに正談に比べ、雑談には自身の直接的・間接的体験などについて話す自己開示 (self-disclosure) や、人の言葉の直接・間接引用 (reported speech) が多く用いられ、また娯楽としての価値ゆえに、誇張や虚言も許されるだろう。しかし正談はあくまでもタスク遂行がその目的であり、人を笑わせ、人と人の間に接続感覚を生じさせることはその直接的目的ではない。雑談とそうでないものを識別する際には、以上のような指標が参考になるであろう。

6. 本書のねらい

上記3つの雑談をめぐる指標は、緩やかに雑談の特徴を炙り出してはくれるものの、雑談の本質に近接するにはまだ多くの問いを有する。たとえば、雑談と正談の境界線はそもそも明確に引けるものなのか。また雑談と正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

談の間を行き来する会話においては、何をきっかけに2つの領域への行き来がされるのだろうか。また、雑談における遊びや詩的(poetic)なことばの使用と、正談における詩的性やレトリックとの相違点はどこにあるのか。子供は雑談ができるのか。また母語、第二言語における雑談の能力はいかにして習得されるのか。噂話、ホラ話、井戸端会議から恋愛話まで、そのどこまでが雑談の範疇に含まれるのか、などである。

本書に収められた13篇の論文は、「まちづくり」のための市民の話し合い、政治家の演説、南アフリカのグイのよもやま話からLINE上でのスタンプを用いた友達とのやりとりまで、万華鏡のように異なる場面や状況、文化的コンテクストでの雑談的やりとりに光が当てられている。その内容は、制度的場面での雑談、マルチモダリティと雑談、関係性構築のための雑談、そしてジャンルとしての雑談の4部に分けて展開している。

第1部の制度的場面での雑談では、非日常的場面で生じる雑談を扱う。口火を切るのは、裁判員評議の場で裁判官がくり出す雑談について分析した堀田論文である。堀田は目的指向が強く、会話の脱線が起きにくい評議の場において、自由に意見を言い合える雰囲気を醸造する上でいかに雑談が有効かをGriceの協調の原理をベースに分析する。次の東論文は、異なる時代の2人の政治家による「演説」という公的な話し言葉の雑談度を比較し、時代によって変化する「雄弁」な話し方に着目する。そこでは、文末表現やポーズの取り方、物語の挿入などの分析から、現代日本社会の演説が次第に話し手中心から聞き手中心へと雑談化してきていることが指摘される。3つ目の村田論文は、最近増えてきた市民参加の話し合いにおける雑談の役割に切り込む。所属も年齢も異なるほぼ初対面の人々がまちづくりの話し合いをする際、本題に入る前の雑談や、ファシリテーターのデザインする雑談的会話がいかに参与者のインタラクションに影響を与えるかが実証的に分析されている。

制度的な場面であれ、日常場面であれ、雑談は「話しながら料理をする」、「お茶を飲みながらおしゃべりする」といった特定の行為に付随するマルチモーダルな活動である。第2部のマルチモダリティと雑談では、まず鮨職人が鮨を握りながら客と会話をする様子をビデオ録画した平本・山内論文

が、「注文をとる」といった鮨屋の作業としての行為連鎖と雑談との切り離しがいかに行われるかを分析し、さらにこうした行為が常連客とそれ以外で使い分けられている可能性を示唆する。続く坊農論文では、手話会話者がたこ焼きを焼きながらおしゃべりをする多人数会話の微細な分析から、雑談が身体的アクティビティといかに共起するかについて鋭く切り込まれている。また、アフリカ狩猟採集民のグイのよもやま話を扱う菅原論文では、同一命題を多人数でくり返す展開の分析を通し、遊び的な会話を真面目な会話と区別し、規則付けようとすることの限界について論じつつ、身体的なかかわりあいとしての会話の本質に迫っている。

第3部の関係性構築のための雑談においては、4本の論文が異なる視点から友人間のおしゃべりとしての雑談的やりとりを分析している。最初の筒井論文は、親しい友人間の雑談において、評価の上での対立が起きた際の雑談の展開方法について分析するとともに、笑い合いながらの言い合いが共有感覚を引き伸ばし、雑談の醍醐味としての遊びとなる過程を考察する。次の大津論文では、母語話者と非母語話者の友人間の雑談分析を通し、言語能力や当該文化についての知識の差異がある会話参与者が、いかに非対称な関係性が現れることを避けつつも雑談を続けるかが考察されている。続く白井論文は日本語とドイツ語のインターネット掲示板での多人数チャットを分析している。ここでは日本語チャットでは会話への割り込みが多く、多人数会話が維持されやすいのに対し、ドイツ語では発話の重複が避けられ、多人数会話がペアの会話へと落ち着く様子が分析され、雑談形式の言語的、文化的異なりが浮き彫りとなる。第三部の最後に収められた岡本論文ではチャットシステムとしてのLINEのスタンプを利用した雑談について分析がされており、友人同士のやりとりにおける雑談的な楽しさやノリが、いかにビジュアルコミュニケーションを介して創発されるかが考察されている。

第4部のジャンルとしての雑談では、雑談の位置するジャンル性について問う論文が収められている。捕鯨問題についてのインタビュー中に立ち現れるゴシップを扱う山口論文は、活動タイプという概念を用いながら、「質問」と「応答」との発話連鎖において「雑談部」と「非雑談部」がいかに指

標されるか分析するとともに、制約の中での逸脱を可能とするコミュニケーション遂行能力について考察する。次の遊びとしての雑談に焦点をおいた井出論文では、アメリカ社会の公的場面において交わされる遊びとしての車のバンパースティッカーのメッセージとコンビニなどのサービス会話における自己開示に共通する機能の分析を行い、こうした雑談的やりとりが創発する感性的快について論じる。最後の片岡論文はゴシップに焦点を当て、ある遭難死亡事故をめぐって親しい友人間で交わされた険悪なゴシップ（噂話・陰口）を分析する。その中で雑談としてのゴシップが、責任追及や誹謗といった正談へと発展していく様子から、雑談のもつ政治的行為としての側面に光を当て、ジャンルとしての雑談の域とその魅力とを改めて問い直している。

本書の構想は、2013年9月に信州大学で開催された社会言語科学会大会でのワークショップ「雑談の美学を考える」に端を発する[1]。このワークショップでは日本語談話、米語談話、そして異文化コミュニケーション場面にみられる雑談の構造や形式、機能と役割、また詩的な遊びとしての特徴について議論がされた。また雑談を通した関係性構築や、雑談が参与の場をいかに私的・公的に構築するのかといったダイナミックな相互行為のプロセスについて考察がされた。翌年2014年7月には龍谷大学でラウンドテーブル「雑談の美学を考える」が開催され、雑談的なやりとりに関連して12名の研究者が異なる切り口からの発表を行った。ラウンドテーブルの発表者と聴衆を交えた全体討議では、1）雑談とは何か、おしゃべりやトークとどう異なるのか、2）雑談のもつコミュニケーション力と機能とは何か、また3）他文化の雑談にみる実践コミュニティごとの特徴と言語・文化を超えた普遍性とは何かについて意見交換が行われた。本書はその成果をまとめたものである。

本書の題名にある「美学」とは、自然や芸術における美の本質や構造、また感性的認識について研究する学問である。極めて情緒的で主観的なタイトルともいえるが、純粋でなく、混じりものの集まりと捉えられてきた「雑」談にあえて光を当てることにより、人間のもつ根源的かつ多岐に渡るコミュニケーション力が再評価され、読者にとって雑談のもつ魅力の発見や再発見に本書が繋がれば幸いである。

注

1　詳細は村田・井出・筒井・大津(2014)を参照されたい。

参考文献

Bailey, Benjamin. (1997) Communication of respect in intercultural service encounters. *Language in Society* 26(3): pp. 327–356.

Beinstein, Judith. (1975) Small talk as social gesture. *Journal of Communication*. Autumn issue: pp. 147–154.

Coupland, Justine. (ed.) (2000) *Small Talk*. London: Longman.

ダンバー・ロビン著、松浦俊輔・服部清美訳(1998)『ことばの起源—猿の毛づくろい、人のゴシップ』青土社.

Drew, Paul and John, Heritage. (eds.) (1992) *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*. Cambridge: Cambridge University Press.

Duranti, Alessandro. (1997) *Linguistic Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Eggins, Susanne and Diana, Slade. (1997) *Analyzing Casual Conversation*. London: Cassell Publishing.

藤本学・村山綾・大坊郁夫(2003)「三者会話におけるトピックの変遷と会話の展開について—討論条件と親密条件における会話スタイルの違い」『社会言語科学会第12回大会発表論文集』pp. 33–36.

Goodwin, Candy and John, Heritage. (1990) Conversation analysis. *Annual Review of Anthropology* 19: pp. 283–307.

樋口斉子(1997)「初対面会話での話題の展開」『平成7年度～平成8年度文部科学省科学研究費—基盤研究(C)(2)—研究成果報告書 日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』(研究代表者：西郡仁朗)pp. 50–57.

井出里咲子(2005)「スモールトークとあいさつ—会話の潤滑油を超えて」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語科学—異文化とコミュニケーション』pp. 198–215. ひつじ書房.

井出里咲子(2008)「スモールトーク」唐須教光編『開放系言語学への招待—文化・認知・コミュニケーション』pp. 171–192. 慶應義塾大学出版会.

伊集院郁子(2004)「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違」『社会言語科学』6(2): pp. 2–26.

河内彩香(2009)「日本語の雑談における話題の展開方法」『東京大学留学生センター教育研究論集』15: pp. 41–58.

熊谷智子・木谷直之(2005)「三者面接調査における雑談的行動―回答者同士の相互作用に着目して」『社会言語科学会第16回研究大会発表論文集』pp. 62–65.

串田秀也(1997)「会話のトピックはいかに作られていくか」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』pp. 173–212. 新曜社.

Levinson, Stephen. (1983) *Pragmatics*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.

李麗燕(2000)『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究―会話管理の観点から』くろしお出版.

Lindenfeld, Jacqueline. (1990) *Speech and Sociability at French Urban Marketplaces*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

Malinowski, Bronislaw. (1923) The problem of meaning in primitive languages. In Ogden, C. K. & Richards, I. A. (eds.) *The Meaning of Meaning: A Study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*, pp. 451–510. London: Routledge and Kegan Paul.

三牧陽子(1999)「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー―大学生会話の分析」『日本語教育』103: pp. 49–58.

Murata, Kazuyo. (2014) An empirical cross-cultural study of humour in business meetings in New Zealand and Japan. *Journal of Pragmatics* 60: pp. 251–265.

Murata, Kazuyo. (2015) *Relational Practice in Meeting Discourse in New Zealand and Japan*. Tokyo: Hituzi Shobo.

村田和代・井出里咲子・筒井佐代・大津友美(2014)「第32回研究大会ワークショップ：雑談の美学を考える―その構造・機能・詩学をめぐって」『社会言語科学』16(2): pp. 112–118.

大津友美(2005)「親しい友人同士の雑談におけるナラティブ―創作ダイアログによるドラマ作りに注目して」『社会言語科学』8(1): pp. 194–204.

佐々木由美(1998)「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話―同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12: pp. 110–127.

Schneider, K. Paul. (1988) *Small Talk: Analysing Phatic Discourse*. Marburg: Hitzeroth.

筒井佐代(2012)『雑談の構造分析』くろしお出版.

宇佐美まゆみ・嶺田明美(1995)「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン―初対面二者間の会話分析より」『日本語学・日本語教育論集』2: pp. 131–145.

目　次

序章
雑談とその諸相
井出里咲子・村田和代 …… iii

第1部　制度的場面での雑談
―公の場でのその役割―

法コンテクストの雑談
模擬裁判員裁判での評議における談話の分析
堀田秀吾 …… 3

「雑談的」スピーチと「非雑談的スピーチ」
小泉純一郎と尾崎行雄
東 照二 …… 23

まちづくりの話し合いを支える雑談
村田和代 …… 51

第2部　マルチモダリティと雑談
―○○しながらしゃべる―

鮨屋のサービス文化と雑談
平本 毅・山内 裕 …… 73

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com